［論　文］

野田市の山岳信仰②
浅間塚が語る富士講の隆盛

石田年子

はじめに

木枯しが吹きはじめる季節になると、三県鶏鳴之地と呼ばれる関宿城博物館の地からも富士山の華麗な姿をくっきりと見ることができる。空気が澄み建物も低かった明治期までの富士山は、関東一円の民衆にとってはまさに神仏の住む霊峰として映ったことであろう。

修験者など一部の宗教者に独占されていた霊山への入山が、一般人へも軽い潔斎で許可される江戸中期になると、山岳信仰は庶民の間に大きなひろがりを見せ始める。その代表とされるものが富士信仰で、市井で修行を重ね先達となった人物を中心に多くの講（富士講）が結成され、江戸市中では「八百八町・八百八講」と云われる程の隆盛をみせる。

その富士講組織が枝講を作り、幕末には関東一円に爆発的に拡大され、江戸幕府の禁止令をものともせず活発な活動がなされるのであるが、江戸文化がストレートに伝わった野田地方の富士講はどのようであったのか。市内に残存する富士塚や関連石造物からその全貌を追ってみることとする。

一　富士講碑

筆者はここ数年かけて、神社境内や路傍等の富士信仰グループによって造立された石造物（以後、富士講碑とする）の調査を行い、二六二基を確認している。又、それが祀られた富士塚も大小取り混ぜて七三基を調査した。その調査結果から、野田市内の富士講の動きを考察してみることとする。

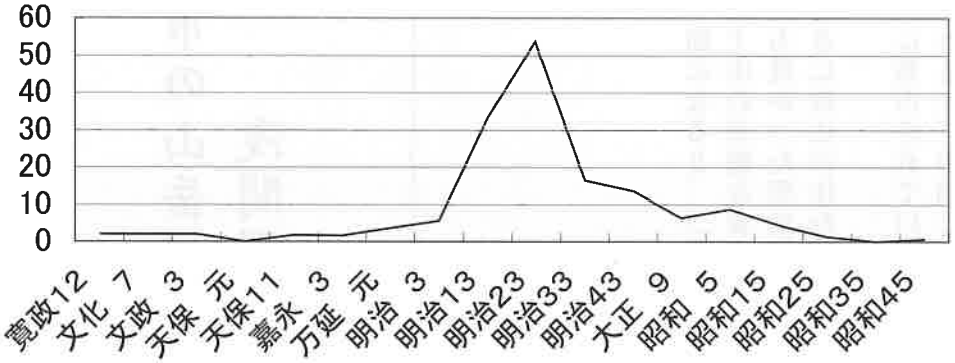
1．富士講碑造立の推移

図1の折れ線グラフ（年代が明記された石造物一五七基）によれば、江戸後期から始まる富士講碑の造立は、幕末までは大きな進展もなく推移していたものが、明治期に入ると俄かに数が増し始め、明治一〇年代を頂点とする明治半に、野田市全域で爆発的

に行われたことが見て取れる。各集落の鎮守神社境内に築かれた富士塚上の本尊碑に限って云えば、明治一七年（一八八四）で全ての造立が終わっている。

このように石造物から見る限りでは、当市の富士講は神道転換後の明治初期に大きな富士講ブームが起こり、明治三〇年（一八九七）前後にはそのブームが山を越えたということとなる。

図１　富士講碑造立年の推移



２．江戸時代の富士講

ここで注意したいことは、先の判断はあくまでも石造物の造立からのみの結果であり、明治期に入って初めて当地方に富士講が広がった訳ではないということである。

江戸幕府は富士講のあまりの隆盛に危機感を抱き、幾度となく富士講禁止令を出しているが、特に嘉永二年（一八四九）の禁止令は厳しく、その際にそれまで造立した石塔を廃棄した可能性もある。

しかし、富士講禁止令をキリシタン弾圧と同等に捉え、野田市に於ける富士講が明治期まで途絶えたと考える向きもあるが、残存する江戸期の石造物から推すと事実と異なるようである。

関宿城下に於いては富士講禁止令が出た翌年の嘉永三年（一八五〇）に、すでに丸宝講・関宿講中七〇名が佐野市天明の大川四郎治と云う御鋳物師に依頼して立派な不動明王像を造立しているし、江戸川西岸の杉戸町目沼の摩多利神社境内には丸宝講の造立による文久二年（一八六二）造立の浅間碑がある。注目されることは、この碑の台座二段にわたり二百名余りの氏名がビッシリと彫り込まれており、その半数が野田市の講員達であるということである。又、万延元年（一八六〇）の富士御縁年とされる庚申年には、岡田地区に木花咲耶姫像を刻む浅間碑も造立されている。このような事例から、明治期の富士講の隆盛は江戸期の富士講をベースとしての広がりであることは間違いないといえる。

それ以後、ブームが去り村内に定着した富士信仰は、村の季節行事に組み込まれたり、地域の講で富士登山者を募って登山を行うなど、穏やかな動きに推移し、現在は殆どの地区が講としての動きを停止してしまっているようである。

杉戸町目沼　摩多利神社の浅間碑

二　富士講碑の種類

野田市内から採取した二六二基の富士講関連石造物は多種多様で、関係者以外の人々には難解なものが多い。次に市内で確認された富士講碑を、種類別に説明をしてみる。

1．本尊の名称

①富士浅間大菩薩　仙元大菩薩

富士信仰の本尊を現す名称であるが、大菩薩は神仏習合時の神の名であるため、神道が主流となった明治維新後は使われなくなった。江戸期に本尊として祀られていたものも、再建されて取替えられた例もあり、市内には五基が確認されるのみである。

②浅間大神　浅間神社　浅間宮

神道の本尊の名称である。野田市内ではこの名称で自然石碑のものが最も多い。

③木花咲耶姫（このはなさくやひめ）

富士山の祭神は木花咲耶姫とされており、浅間大菩薩や浅間大神と同義である。コノハナは桜を意味し、神話の世界では最も美しいとされる美女神である。天孫瓊瓊杵（ニニギ）尊に不貞を疑われた姫が身の潔白の為に産屋に火を放ち、火中で無事出産を果たしたという神話から、安産の神として女性達の信仰の対象にもされている。

木花咲耶姫が富士山の祭神として庶民に知られる様になったのは、神道の興隆し始める江戸後期のことで、富士吉田市の御師等が発行する絵札などに描かれるようになったのは万延年間（一八五九）からのことだという。万延元年に造立された岡田地区の富士講碑には美しい木花咲耶姫像が線彫りされており、配られた絵札をもとに早々と造立した可能性もある。

北口浅間本宮の神礼

④参明藤開山（さんめいとうかいざん）　三国第一山

富士山そのものを現し、この様に彫られている場合も多い。

2. 小御岳大神　小御嶽神社　磐長姫命

富士山五合目にある小御嶽神社の事を指す。富士塚では本尊の浅間大神より一段下に祀られており、祭神は木花咲耶姫の姉にあたる磐長姫である。

木花咲耶姫に関わる神話の中に、天孫瓊瓊杵尊が木花咲耶姫と磐長姫の父親である大山祇命の家に泊ることになった時、夜伽として差出された長女の磐長姫が醜女であったことから同衾を断り、次女である木花咲耶姫を一目で気に入ったとする話がある。丸岩講は好んで磐長姫という名称を使ったようであるが、丸宝講の多い野田市内では二基のみである。

3. 元祖霊神　角行霊神

富士講の祖とされる長谷川角行を霊神化して祀ったものである。長谷川角行（一五四一～一六四六）は永禄三年（一五六〇）の庚申の年を始めとして、富士山麓の人穴や吉田口で超人的な修行を行い、富士信仰の行法を編み出した富士講の祖とされている人物である。小御嶽神社とともに富士塚に祀られる例が多い。

船形地区松山に神明社・浅間社合祀の塚がある。平成一三年に地元民の尽力により再建された社であるが、ここには総髪で錫杖と数珠を手にした角行の像が祀られている。角行に関しては、千葉県内では文字塔で祀られることが大半で、このように像としてあることや、造立年が文政二年（一八一九）であることも珍しいようである。

4. 食行身禄　身禄霊神　食行霊神

食行身禄（一六七一～一七三三）は、伊勢の出身である伊藤伊兵衛が富士行者として名乗った名前である。伊兵衛は商人をしながら厳しい富士修業を重ね、享保一八年（一七三三）には庶民救済と世直しを願い、富士山の烏帽子岩で三一日間の断食の末に入定する。これを契機とし弟子達が講（富士講）を作り布教にあたったことから、江戸後期には庶民の間に富士講が急速に広がり、食行身禄は身禄派の講祖として敬われ祀られることになる。

5. その他の石造物

①大日如来像

富士系修験（村山修験）の富士山の本尊は大日如来である。かつては富士山頂に大日堂が建てられ、中世期の信仰者達が奉納した大日如来像や掛け仏が祀られていたが、明治の廃仏棄釈の際に火口に投げ入れられたり壊された為、現在は跡形もない。

江戸時代の富士信仰に大日如来が出てきても不思議ではなく、野田市では文化一一年（一八一四）に丸藤・丸鳩両講によって造立された大日如来坐像（金剛界）が、中里・三社権現の富士塚中に祀られている。縦五四センチほどの目立たない石塔であるが、時代・造立者・本尊のどれをとっても当地方の富士講を測るには重要なものである。

中里三社権現の大日如来座像

②先達顕彰碑

講の維持拡大の中心的人物であった先達の顕彰碑や墓石が五基、御子孫宅の庭や塚に保存されている。これから当時の講の様子を推察できる貴重なものである。

③寄附連名碑

富士塚には、塚を築くにあたってお金を寄付した人々の氏名と金額を刻んだ寄付連名碑が埋めこまれている。ここからも講の動きが読め、富士講の良い資料となる。

築山・土持碑も同種のものであるが、この場合は主に人力の協力で、土を積み上げたり石を運ぶという築塚工事の奉仕を行ったことに対する連名碑である。

④内外八海大神　富士森稲荷大神　宝永山

実際の富士山麓にある神社や山で、富士山に似せるために富士塚に配したようである。

三　富士塚

1．浅間塚の由来

日本で最初に富士塚が築かれたのは安永八年（一七七九）のことで、富士講の祖と仰がれた食行身禄（しきぎょうみろく）の直弟子であった丸藤（まるとう）講の祖・高田藤四郎が、富士山に直接登ることの出来ない女性や子供、老人や虚弱な者達の為に、富士山に模した塚を江戸の戸塚村（新宿区高田）に築いたのが始まりである。植木屋を本業とする藤四郎は出来る限り富士山に似せようと、黒ボクと呼ばれる富士溶岩で周りを囲み、身禄が入定した烏帽子岩に見立てた巨岩や五合目の小御嶽神社を配し、御胎内の洞窟まで造るという凝ったものであった。それ以後、関東一円には多くの富士塚が築かれて行ったようである。

2．野田市の富士塚

図2で見るように、野田市内の富士塚は大小合わせて七三基で、市内全域に造立されている。天明二年（一七八二）に早々と築塚されたものもあるが、大半が明治期の造立と思われ、その内の三七基は各地区の神社の境内かその周辺に築かれているが、他の三六基は個人持ちで、自宅の庭や敷地内に屋敷神として祀られている。これらの家は明治期に先祖が富士講の先達であったり、講社の役付きであった場合が多く、富士講研究者によれば、このように自宅に富士塚を持つ例は千葉県の他地域には見られず、野田市特有の形態だという。

特に密集している地域が旧関宿町南部と川間地区であり、この地域の多くの家が敷地内に小さな富士塚や浅間碑を祀っており、かつての富士信仰隆盛の名残りと思われる。

3．市内富士塚の詳細

「白雲を貫く」と形容された大塚から、個人宅の庭の片隅に土盛りされた細さやかな塚まで多種多様なものが確認されたが、その中から特徴のあるものを何基か紹介してみたい。

①木間ケ瀬飯塚　浅間神社

木間ケ瀬飯塚地区・白山神社近くの浅間塚は、市内の浅間塚の中でもその大きさは群を抜き、その歴史も古い。郷土誌『木間ケ瀬の歴史』[1]に拠れば、「文武二年（六九八）の大旱魃に際し、雨乞い祈願の為村民戮力して創建す。浅間窪の名これより起こる」とあり、その真否は別として、この地に古くから鎮座する浅間神社であることは確かなようである。

驚くべきことは、丸藤講の藤四郎が初めて富士塚を築いてから三年後の天明二年（一七八二）に、早々と当地に塚が築かれてい

図２　浅間塚・浅間碑分布図

ることである。当時の名主・岩本治平祐直が願主となり惣村で寄付が行われ、村民総出で築塚が行われた詳細が、岩本家所蔵の「富士浅間阿ま屋石かき奉加帳」や「富士浅間山築上人足帳」によって知ることができる。村人達の築塚時のスローガンは「富士山乃高鳶木坂　築上て所繁昌　富貴萬福」であったが、翌年の夏には信州・浅間山が噴火して辛い日々が続くこととなる。

現在の塚は、明治初期に暴風によって崩壊したため、明治一一年（一八七八）に木間ケ瀬村村民総意のもとに再建されたもので、頂上の浅間碑「浅間神社」の揮毫は、時の陸軍大将・有栖川熾仁親王によるものである。

②宝珠花・日枝神社　浅間塚

高さ四メートル余りの塚で、全体が富士溶岩の黒ボクや他の岩石で組み立てられ、頂上に続く階段が三方向から造られるという、小振りではあるが本格的な富士塚である。

頂上の碑「浅間大神」は明治九年（一八七六）に、丸宝講により造立されており、中心者として刻まれる西宝珠花村教導職・村瀬寳、平井村教導職・斉藤宇平、東宝珠花村先達・柴田松二、平井村先達・大塚又平の四人は、この直後から村瀬寳をリーダーとして、野田市内及び茨城県西部に向って瞠目すべき布教活動を展開しはじめる。

③平井・斉藤家　富士塚

斉藤兵三郎個人により万延二年（一八六一）に造立されたものである。本尊・仙元大菩薩の下には、小御岳石尊大権現に大天狗・小天狗、元祖食行身禄に北行鏡月・仙行伸月と、それぞれの脇士銘も刻まれ、猿二匹が正面を向いて合掌し、左側面に和歌が彫られている。前年の庚申年にちなんで建てられたものと思うが、この頂上の碑は江戸時代における神仏混交時の浅間碑形式の典型的なもので、周辺地域ではあまり類の無い石塔である。

斉藤平三郎は、平井村周辺の浅間碑に傳教子として名がみられ、丸宝講の熱心な講員だったようである。

④清水・清水公園　富士塚

清水公園梅園の奥に築かれた、土盛り状で緩やかな傾斜の塚で、台座正面に大きく山参講のマークが彫られた二メートル余りもある「参明藤開山碑」が頂上に建っている。明治九年（一八七六）に山参講の野田講社による造立で、麓には丸の講により昭和二年（一九二七）に大燈篭が奉納されている。

石造物だけで判断するならばこの塚は明治期の築塚となるが、江戸後期に富士講身禄派の指導者として活躍した鳩ヶ谷宿の小谷三志[2]が、文化年代に書き残した日記[3]中に、この塚に関わる一文が残されている。

野田町・丸の講との交流が深くなり始めた文化五年（一八〇八）一月二〇日、三志が弟子二人を伴って野田町を訪れた日の記述に「野田亀屋、辻、清水お拝に行く。御山地取相談」とあり、翌二一日には「金乗院へ寄る。此寺、中申の方に当り御山地取をいたす」の記述がみえる。「御山地取（おやまちどり）」とは富士塚の用地入手のことを指し、翌日には中申方向にあたる金乗院に立ち寄り、塚の用地買入れについて交渉を行ったのではなかろうか。とすると、かつては金乗院の寺域であったこの富士塚は、文化五年（一八〇八）には小谷三志の指導のもとで、既に塚が築かれていたことになる。

同じく、報恩寺大師山の富士塚もトップの石碑は明治一六年（一八八三）に山参講によって造立されているが、嘉永年間の文書[4]に「浅間下」の地名がある事から江戸後期には浅間塚が造立されていたものと思われる。

⑤木野崎・荏原天神　浅間塚

言われなければ塚があることなど気付かない林の中の塚である。林に続く道を少し入ると、左右に急勾配の塚がそびえ、異界に入ったような妙な感覚を覚える。左の塚は御嶽塚、右が富士塚となっている。野田市内の塚中では大きな部類に入るもので、明治一六年（一八八三）造立の「浅間大神碑」は緑岩の自然石。他に小御嶽神社、富士藤稲荷神社、宝永山などの富士山関連石碑が配されている。

この浅間塚には、丸宝講メンバーによる多くの寄附連名碑が残されていることが特徴としてある。特に塚の中腹に立つ幅一七五センチの山型の寄附連名碑には、野田市周辺の丸宝講メンバー一二〇名余りと、その村名が刻まれており、丸宝講の勢力分布がわかる貴重なものである。この当時の木野崎丸宝講社の中心者は、当時若干二五歳の鈴木伊惣治であろうか。

四　富士講

1．富士講の由来

富士講の起こりは、享保一六年に「世のふりかわり」を願い、三一日の断食の後に入定した富士行者・食行身禄の弟子達が、師の教えを世に伝えるべく一般人を対象とする講を作ったことがその始まりである。江戸市中に広まった富士講は、分講・枝講を繰り返し関東一円に広がり、多くの富士講グループが出来るのであるが、野田市内の富士講はどの様であったのか、石造物から推察してみることとする。

2．野田市の富士講

富士講は富士登山の折には同行者を見失わぬ為に、各講ごとに独自にデザインしたマークをつくり、それを染め抜いた旗を造って目印としたのが講紋の始まりであるが、後には講の象徴として鉢巻、行衣、石碑などにも付される様になる。市内で講紋が刻まれた石造物は七七基（富士塚を一基とする）で、九種類の富士講紋が確認された。それを地図に落としたものが図3、九講社の割合を表したものを図4の円グラフに示した。筆者が知り得た各講社の内容を次に記してみたい。

①丸宝講

江戸川西岸の西宝珠花河岸に興った講である。富士講の祖・長谷川角行が修行を重ねた富士山麓の人穴（ひとあな）周辺は、富士講の行者墓が多く立てられている場所であるが、その一角に寛政三年（一七九一）に亡くなった丸宝講の最古先達と目される藤左衛門という人物の墓石がある。このことから、丸宝講の歴史は江戸中期に遡るのではないかとされている。[5]

丸宝講についての研究は未だ進んで居らず、その詳細は定かでないが、丸宝講紋の付された平井地区・齋藤家や目吹・川島家の富士講碑に記される「北行鏡月・仙行伸月」の行者名から推考すると、丸宝講の元講は、食行身禄の直弟子である田辺十郎右衛門[6]（北行鏡月）を祖とする山真講の可能性が強い。仙行伸月は田辺十郎右衛門の息子・中雁丸由太夫の行名で、平井村先達・斉藤宇平はこの御師から誠行正山の行名を授けられている。

西宝珠花・村瀬寶の墓

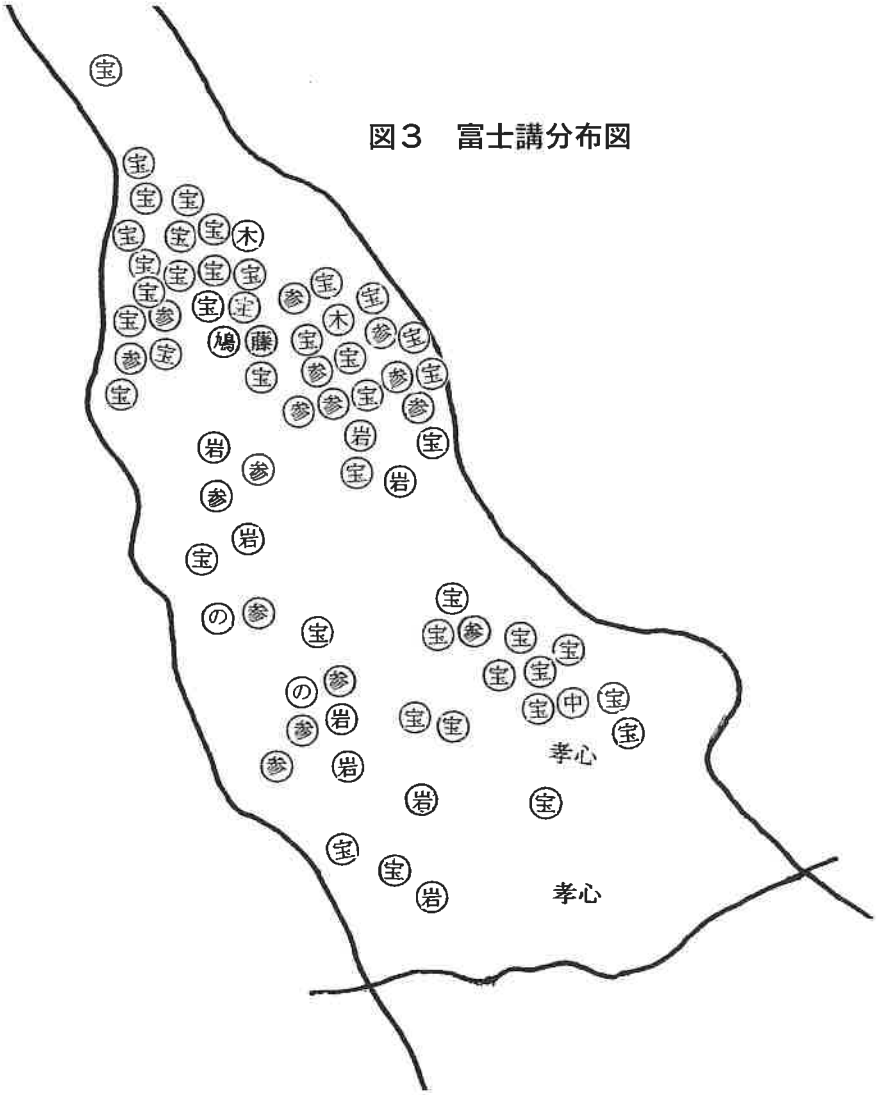
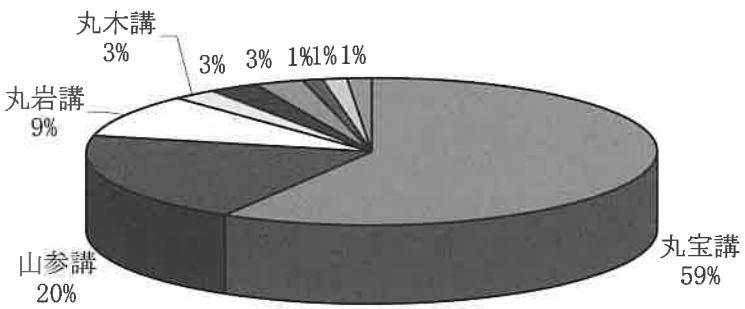


図３　富士講分布図

図４　石造物紋による講の割合



明治維新を迎えた富士講は、神道への転換や組織の再編を迫られ大きく流れが変わるのであるが、扶桑教[7]傘下に入った丸宝講はその時期を上手に乗り切り、勢力の拡大に成功したことが市内の浅間碑でみることができる。明治期の丸宝講は富士講碑の造立を好む傾向があったようで、市内に丸宝マークの碑は多い。

春日部市西宝珠花には、かつての丸宝講の中心地であった丸宝本部と呼ばれるお宅があり、鳥居脇に建てられた明治二八年（一八九五）の寄附碑には栃木県下都賀郡大谷村や茨城県結城郡山川村など遠方の分講社の記載もみえる。他に茨城県坂東市、伊奈町（現つくばみらい市）、栃木県佐野市、足利市、埼玉県川越市等にも丸宝講の広がりが確認され、講の勢力には驚嘆するが、残存する石造物から考えると、これは江戸期からの地盤を基にしている可能性が強く、今後の丸宝講研究の必要性を感じる。又、西宝珠花神社脇の富士塚の規模は、富士塚の多いこの地方でも特別だが、河川改修による移転前の大きさはより巨大で、東西を貫通する胎内くぐり用の洞窟や鉄製の祠もあったという。

②山参講

山参講の講紋の初出は、東金野井の路傍に造立された富士塚の「遷元大菩薩碑」の台座である。山参講は西宝珠花に隣接する塚崎地区出身の大先達・斉藤忠七が率いた講で、丸宝講の先達であった師が幕末の頃に独立して立ち上げた講と思われる。

野田町周辺の繁華な地域を傘下として押さえたもようで、清水公園富士塚、上花輪香取神社富士塚、中野台報恩寺富士塚などが山参講によって造られている。（以下、行者の項で記す）

③丸岩講

埼玉県岩槻市（現・さいたま市岩槻区）の講である。春日部市、越谷市、松伏町など埼玉県・江戸川西岸地域に講の大きな広がりがみられる。野田市は丸岩講の東限のようで、茨城県では見かけることはない。

市内に残る丸岩講造立の富士塚は、尾崎・香取神社傍の明治三年（一八七〇）造立のものと、野田下町の須賀神社裏のものである。山崎香取神社に並ぶ二基の浅間碑は、明治一四、五年（一八八一、二）の造立で、丸岩講紋の刻まれた大振りのものである。その内の一基は大正一三年（一九二四）の香取神社との合祀の際に、西大崎の浅間神社からこの地に移動したもののようであるが、残された浅間塚は頂上に社祠を祀り、現在も地元民によって信仰されている。

尾崎　香取神社前　丸岩講による富士塚

尚、春日部市水角・水角神社奥には明治一三年（一八八〇）、丸岩講によって築かれた本格的な富士塚があり、各村の講員による寄附連名碑三〇余基が所狭しと埋めこまれているが、その中の六基は野田市内の丸岩講メンバーによるものである。岩名村五〇名、吉春村三二名、船形村二八名、桜台村一二名、堤根新田一〇名、山崎村二〇余名で、手洗石は野田町石工・杉崎弥八が奉納している。

これから見て、丸岩講も市内に於いて活発な活動を行っていたと思われる。当時の野田市域の丸岩講リーダーは、記録などから見て岩名村・高須賀三郎兵衛ではなかろうか。

④丸木講

木間ケ瀬村の講で「丸木」の木は木間ケ瀬の頭文字と思われる。因みに当村の御嶽講は「山き講」と称した。富士塚の項で説明したようにこの村の富士信仰は古く、築塚も天明二年（一七八二）という富士信仰に篤い地域で、個別に他講への入信はあったものの、飯塚の浅間神社は村独自の丸木講で守っており、明治一一年（一八七八）の富士塚再建時の記録[8]にも、当時活躍していた他講の先達は一切関与した形跡がなく、下根香取神社の宮司・大井武平が取り仕切ったと推測される。

尚、富士塚築塚の願主であった木間ケ瀬村名主・岩本治平家には寛政五年（一七九三）に「斎服・立烏帽子・指貫・金子」を「富士山御師・小沢信濃守」に贈った覚が残されており、これを辿れば丸木講の詳細が解明できる可能性もあり、今後の課題のひとつである。

⑤丸の講

野田町上町、清水、中野台地区の醤油醸造や舟運関係者の多い講のようである。先の人穴に文化四年（一八〇七）に亡くなった「下総国野田町　俗名亀屋平三郎」という人物の墓があり、脇には「丸の」講紋が彫られていることから、丸の講は江戸後期から続く地方講であったと思われる。

小講であった為か、講が大規模な講の傘下に属することもあり、丸の講リーダーであった亀屋平三郎が亡くなる前後から、小谷三志の率いる丸鳩講の傘下に入り活動していた形跡がある。[9]又、明治初期には、斉藤忠七の設立した山参講の傘下に属し、清水公園の富士塚再建を行うなどしたが、大正時代には独立して丸の講として活動し始めたと思われる。

清水公園・富士塚の麓に「三国第一山」の碑が建てられたのは大正九年（一九二〇）六月で、台座に初めて「丸の」の講紋が彫りこまれている。山参講から独立したのはこの頃であろうか。昭和二年（一九二七）には、二・五メートルほどの大燈篭も奉納している。現在、この富士塚は清水公園が管理しており、講は既に解散しているようである。

⑥不二道孝心講

丸鳩講（鳩ヶ谷市）の先達・小谷三志は、文化年間に富士講身禄派八世を継ぐと、「本来富士行者が行ってきた難行苦行の修行に費やすエネルギーを、世のため人のために使う」など、三志独自の不二道思想を作り上げる。

それを受けて不二道の講員は「土持（つちもち）」と称する河川の築堤工事や道普請などの奉仕を無償で行った。天保一四年（一八四三）の、将軍日光社参の折には、草履、飼葉（かいば）上納を七千人弱の人々が参加して行っている。[10]この運動は三志亡き後の明治期にも不二道孝心講によって引き継がれ、地域の講責任者から土持工事の時間と場所が伝えられると、数十人、数百人もの人々が手弁当で各地から集まり、工事が終了するとあっと云う間に去っていくという人力奉仕が各地で行われた。

この孝心講のメンバーにより、明治九年（一八七六）四月一三日から一六日の四日間、「目吹村築堤土持」が行われた記録が『不二道孝心講土持御恵簿』・鳩ヶ谷の古文書第六集に記載されている。

不二道同志と地元民を合わせて延べ七九六人が参加して行われた工事である。その核として動いたのは、荒巻喜右衛門・白幡清吉・宇佐見惣兵衛などを中心とする西三ヶ尾・三ツ堀の不二道孝心講

のメンバー達であった。

西三ケ尾の不二道孝心講は、文化七年（一八一〇）に小谷三志の弟子となったと推定される三ツ堀米蔵と言う人物[11]からこの地に広められたようで、西三ヶ尾には天保四年（一八三三）に造立された、三志の揮毫による「孝心」の碑が造立されている。明治の宗教再編の時期に不二道は神道への移行を拒否し、三志の教えを実践する「不二道孝心講」を結成したが、福田地区の不二道グループもこの道を選んだようである。

⑦丸藤講

中里・三社権現の富士塚に祀られている大日如来像に彫られた丸藤マークは、身禄の直弟子である高田藤四郎が造った江戸を中心に活動する古くからの講である。これ以外にも、石造物では掴めない、多くの講が市内には存在したと思われる。

五　野田市の富士行者／先達

1．村瀬寳／寳行栄山

春日部市西宝珠花の江戸川土手下にある大王寺の墓地の一角に、村瀬寳の墓地がある。三メートル程の御影石の角柱という巨大なもので、前面には丸宝本部役員によって石鳥居も建てられている。「扶桑教丸宝本部教院長大教正　村瀬寳源朝臣忠之翁命墓」が正面に、「明治二十七歳次甲午八月七日卒　年七十二　東武山衆居士　坪井音書」が裏面に彫られている。村瀬寳については手元に資料がなく、この銘文からの推測となるが、文政五年（一八二二）に西宝珠花村に生まれたと思われる。翁の名が始めて確認されるのは、先に述べた杉戸町目沼・摩多利神社境内に建つ浅間碑である。

三メートル近い大きさの碑で、同時期に山重講が小御嶽石尊大権現碑を、丸岩講が食行身禄碑を造立している。この台座部分に村瀬寳は四〇歳で宝珠花村大先達・寳行栄山、後の山参講大先達・斉藤忠七は塚崎村先達・斉行忠山として記されている。

明治の宗教改革の時期に、丸宝講が神道色の強い扶桑教傘下にはいると、清水・個人宅の浅間碑を皮切りとして、平井村・斉藤宇平、大塚又平、東宝珠花村・柴田松二らと講の拡大に奔走した様子が、市内の浅間碑から知ることができる。当初の身分は宝珠花分社長教導職であったが、年々に権少講義、中講義と変化してゆく。扶桑教丸宝本部の拡大にともない、村瀬寳が布教を行うことはなくなったのか、彼の名が刻まれた浅間碑は明治一七年（一八八四）に茨城県伊奈町戸茂（現つくばみらい市）の天神社に立つ浅間碑が最後となる。いつごろ丸宝本部教院長になったかなどの詳細は不明であるが後述する斉藤宇平の顕彰碑によると、宇平が丸宝本部副教院長に任命されたのが、明治一九年（一八八六）とあることから、その年前後と思われる。家業は呉服屋を営んでいたが、子孫は明治期に他所へ移ったようである。

2．斉藤忠七・忠山斉行

斉藤忠七は春日部市・塚崎（旧庄和町）の人である。安政五年（一八五七）に御師中雁丸由太夫から先達免しを得て、隣接する西宝珠花河岸の丸宝講傘下で活動していた。岡田地区の万延元年（一八六〇）の浅間碑には、塚崎村先達斉行忠山として名を連ねているが、五年後の慶応元年（一八六五）造立の東金野井地区の遷元大菩薩碑には山参講紋の脇に塚崎村大先達・斉藤忠七の文字が刻まれ、忠七が山参講を興したことが宣言されている。

当初は斉藤忠七を慕う丸宝講講員の講替の形跡も見られる事から、多少の軋轢はあったのではなかろうか。因みに忠七も当初は

扶桑教に参加するが、後に富士北口教会へ替っている。[13]

静岡県・富士吉田市の「北口本宮富士浅間神社」本殿右奥に、下総国・塚崎村大先達・忠山斉行（斉藤忠七）の富士登拝六六度を記念した石碑が建っている。明治一二年（一八七九）に造立されたものであるが、そこに記された分講社名に岡田、木間ケ瀬、中里、船形、目吹、吉春、五木、清水、野田町、上花輪、中野台、東金野井、丸井の一四地区が名を連ねており、これにより野田市における山参講の分布が解る。塚崎・雷電神社に明治一三年（一八八〇）に再建として登嶽七七度の記念碑が立ち、近くの共同墓地には緑岩に斉行院忠山霊と大きく刻まれた墓石が祀られているが、命日が不明である。いずれにしても大変に力のあった先達であったようだ。子息峰松こと参行峰山が二代目を継いだ。

3．斉藤宇平／誠行正山

斉藤家は平井村で名主職を務める家柄であった。江戸川堤防下の子孫宅には、「扶桑教大教正　齋藤宇平源朝臣正邦翁命」顕彰碑と、河川改修に依る移転前は、富士塚上にあったと思われる富士講碑など七基が祀られている。

顕彰碑によれば、天保元年（一八三〇）に平井村に生まれた宇平は、安政六年（一八五九）二九歳で富士講に入信し、万延元年（一八六〇）に富士教師中鷹丸由太夫より誠行正山の行名を受けた。

富士登嶽三三度、御中道修行五度、天拝式修行三度を納め、明治一九年には丸宝本部副院長となり、明治三二年に中教正を受けるなどの活躍を経て、明治四一年五月に七九歳で逝去している。

宇平は八歳年上の村瀬寳と共に、丸宝講発展の為に人生を賭けた人物のようである。

4．大塚又平

大塚又平は齋藤宇平の三歳年下の弟で、一三歳で同村の大塚家の養子となり大塚又平と名乗った。兄が富士講に入信したことで又平もそれに従い、明治前期には村瀬寳や齋藤宇平と共に弘教活動に邁進。丸宝本部設立時には会計を担当し、後には茨城県・坂東市の染谷教会所長を務めるなど、扶桑教丸宝講興隆の重要な役割をになった。又、永年の修行で霊力を身につけ、病や災いに悩む人々の救済にもあたり、明治三〇年には権少教正の命をうけている。

これらの詳細は、大塚家裏に明治三五年に建てられた大塚又平の顕彰碑によるもので、顕彰碑裏面には、六一地区の賛同者一三〇名が名を連ねている。この碑は「兄の宇平等が、又平の業績が忘れ去られることを恐れて造立した」と云う趣旨であるが、逝去後のことなのかどうかの記載がない。

平井・大塚又平顕彰碑

5．鈴木伊惣治

野田市木野崎や柏市の丸宝講関連の富士講碑に小分社長や八等

講長の地位で確認される人物である。木野崎・荏原天神の富士塚には「宝永山碑」を奉納している。

明治期に野田南部における丸宝講社の発展に寄与した人物である。木野崎本郷の鈴木家墓地には丸宝講紋の刻まれた伊惣治の墓石が認められるが、それによると明治二七年（一八九四）に三六歳の若さで亡くなっており、「扶桑教贈権中講義　鈴木伊惣治命」の文字が読める。

伊惣治は梅郷村山崎の出身で杉崎與右衛門長男とある。筆者は山崎のとんとんみずき橋に近い杉崎家で、杉崎與右衛門造立の個人富士塚を確認しているが、富士講に熱心な父親の影響をうけて、養子先の木野崎で伊惣治も富士行者として丸宝講社の発展に邁進したのであろうか。

6．宮田与右衛門

小谷三志日記中の野田町において三志の直弟子として頻繁に出てくる人物である。三志が野田町の丸の講と交流が始まった時期、酒造家「かね万」の若き当主である宮田与右衛門は重い眼病に悩んでいた。病平癒と宮田家の繁栄の祈願を依頼したことが契機となり、宮田一族は三志に急速に傾倒し、丸鳩講に入信した与右衛門は直弟子として活発な活動を開始する。三志の日記では酒造家として出ているが、『野田の醤油経営史料集成』[14]の「文政七年八組造醤油屋名簿・野田組十九名」に宮田與右衛門の名が入っていることから、日記が書かれた文化一一年（一八一四）以降に、醤油醸造業に参入したものと思われる。文政七年（一八二四）に野田上町の愛宕神社は現在の華麗な彫刻を施した社殿に再建されたが、西光院に残る当時の棟札によると大願主は宮田與右衛門となっており、以後一四年の間、当神社の総代も務めていたようである。「かかる夜に　め出たく積もる雪霜は　弥陀の浄土へ　道開きせん」の辞世の句を残して、嘉永元年（一八四八）に、六二歳で亡くなっている。

六　浅間行事

今まで述べてきた様に隆盛を極めた富士信仰が、人々の生活から遊離し下火となって久しく、どの様な信仰行事があったのかなどの聞き取りも今となっては難しい現状である。

富士講研究の第一人者であった故・岩科小一郎著による『富士講の歴史』[15]中に、氏が昭和三八年四月に野田市に調査に訪れた際、富士塚上の石碑に「仙元一百社奉拝寒行㊗本部」のお札が貼られていたことにふれられている。厳冬の寒さの中で白装束に身を固めた講員が浅間碑百ケ所を巡拝する習俗が存在したのである。

1．旧関宿・浅間神社

塚上に社殿の建つ神社で、歴史は古いと思われる。富士山の山開き前の六月下旬に、旧関宿の辻や堤防下に竹に注連縄をはった結界が建てられ、六月三一日には初浅間として今年生まれた子供を連れて地域の人々がお参りする。

2．岡田地区の浅間巡り

岡田地区は長い間、富士浅間神社に代参をたてることを続けていた。出発前夜に三人の代参者が「浅間巡り」と称して、岡田・平井・東宝珠花地区の神社や個人宅の浅間塚二〇ケ所余りを参拝して廻り、翌日の代参者出発後に、地区の氏子全員も代参者の無事を祈り、同じく浅間巡りを行う。巡拝終了後は当番宿に集まり富士嶽大神の掛軸に御経をあげ、うどんを打って会食を行うという行事であったが平成一〇年七月を最後に代参講は終わりとなった。

又、岡田地区が行う御比射の際には、祭壇に他の祭神と共に富士講の御見抜き、富士曼荼羅等の掛軸も掛けることから、かつて

の富士講の隆盛を偲ぶことができる。

岡田地区最後の浅間行事風景

寒行の貼り札

台町下納谷・浅間神社　初山風景

野田市浅間塚・浅間碑一覧

浅間塚

総No.	No.	所在地	塚規模	銘文等	講紋等	塚中で最も古い年号	西暦
1	1	木間ヶ瀬飯塚　浅間神社	極大	浅間神社　外９基	【丸木講】	天明３年６月	1783
2	2	中里　農協前道	小	銭間宮		寛政７年９月	1795
3	3	瀬戸浅間台　浅間神社	中	木造社　外２基		寛政13年	1801
4	4	中里　三社権現	大	浅間太神供養塔　外５基	丸宝･山参紋	明治４年６月再建	1871
5	5	清水公園　浅間神社	大	参明藤開山　外６基	山参･丸の紋	文化５年	1808
6	6	船形　浅間･神明社	中	角行像･木之花咲耶姫像　外		文政２年５月	1819
7	7	三ツ堀　香取神社	中	仙元宮/再建	三ツ堀	天保12年６月	1841
8	8	堤台　八幡神社	中	富士浅間宮･社額		嘉永５年６月	1852
9	9	中野台　報恩寺	大	浅間大神　外４基	山参紋	嘉永年間	1854
10	10	岡田　香取神社近斜面	中	木花咲耶姫像線刻　外４基	丸宝紋	万延元年	1860
11	11	平井　香取神社	中	仙元大菩薩　浅間大神　外6基　再建	丸宝紋	万延元年	1860
12	12	平井　個人宅	小	仙元大菩薩/二猿	丸宝紋	蔓延２年２月	1861
13	13	平井　個人宅	小	浅間大菩薩/現無し	丸宝紋	元治元年11月	1864
14	14	木野崎高根　個人宅	中	浅間神社/明治33年再建		元治元年11月	1864
15	15	五木　香取神社	不明	富士浅間大菩薩　外２基	村講中	元治２年２月	1865
16	16	関宿下納谷　浅間神社	中	社殿		江戸	
17	17	山崎大崎　浅間神社	中	木堂		江戸	
18	18	西三ケ尾　浅間神社	丘陵	木堂		江戸カ	
19	19	尾崎　香取神社前道	中	浅間宮　外２基	丸岩紋	明治３年５月	1870
20	20	清水　個人宅	小	浅間大神	丸宝紋	明治８年７月	1875
21	21	東宝珠花　日枝神社	中	浅間大神　外５基　再建	丸宝紋	明治８年５月	1876
22	22	目吹　川島家横	中	浅間大神　小御岳神社　外３基	丸宝･山参紋	明治９年６月	1876
23	23	平井　個人宅	不明	浅間大神　顕彰碑外５基	丸宝紋	明治10年11月	1877
24	24	木間ヶ瀬下根　個人宅	不明	浅間大神　外２基	丸宝紋	明治10年４月	1886
25	25	岡田　個人宅	中	浅間大神　外４基	丸宝紋	明治11年11月	1878
26	26	岩名　香取神社	中	浅間大神　外５基	丸宝紋	明治11年７月	1878
27	27	山崎　個人宅	小	浅間大神　外４基	丸宝紋	明治11年10月	1878
28	28	中里阿部　個人宅	不明	参明藤開山　外２基	【山参講】	明治11年10月	1878
29	29	野田上町　西光院	小	参明藤開山　外２基	山参紋　同行	明治11年１月	1878
30	30	親野井　八坂神社	中	浅間大神･小御岳･元祖	丸宝紋	明治12年12月	1879
31	31	東宝珠花　山王社	小	浅間大神　外２基	丸宝紋	明治12年11月	1879
32	32	目吹下　香取神社	小	浅間大神　外３基		明治13年11月	1880
33	33	大殿井長割　個人宅	不明	富士浅間大神　外３基	丸宝紋	明治13年12月	1880
34	34	江戸町　香取神社	中	浅間大神･元祖･角行	巴紋	明治14年６月	1881
35	35	上花輪　香取神社	大	富士山浅間大神　外７基	山参紋	明治14年５月	1881
36	36	上灰毛　稲荷神社	中	浅間大神　外１基	丸宝紋	明治14年４月	1881
37	37	船形　香取神社	中	浅間太神	丸宝紋	明治14年12月	1881
38	38	東宝珠花　個人宅	小	浅間大神	丸宝紋	明治14年10月	1881
39	39	木間ヶ瀬松ノ木　個人宅	小	浅間神社	丸宝紋	明治14年６月	1881

40	40	木間ヶ瀬大山　八坂神社	中	浅間神社　外３基	丸木紋	明治14年11月	1881
41	41	吉春　個人宅	中	浅間大神　外１基	山参紋	明治15年10月	1882
42	42	山崎　香取神社	不明	浅間大神　外４基	丸岩紋	明治15年12月	1882
43	43	平井　松本家脇		浅間大神　外２基	丸宝紋	明治15年1月	1882
44	44	木間ヶ瀬小作　個人宅	小	浅間大神　小御岳神社　元祖霊神	山参紋	明治16年12月	1883
45	45	木野崎下町　荏原天神	大	浅間大神　外９基	丸宝紋	明治16年10月	1883
46	46	船形木戸脇　個人宅	小	参明藤開山　外３基	丸宝紋	明治17年1月	1884
47	47	三ツ堀　福田小脇	小	浅間大神　外１基	丸宝紋	明治17年3月	1884
48	48	桜台　桜木神社	不明	浅間大神　外１基	丸岩紋	明治17年11月	1884
49	49	野田下町　須賀神社	中	浅間大神　外７基	丸岩紋	明治17年10月	1884
50	50	目吹下　個人宅	中	浅間大神　外２基	丸宝紋	明治20年3月	1887
51	51	木野崎本郷　遍照院下	小	浅間大神　外２基	丸宝･山中紋	明治20年6月	1887
52	52	谷津　谷津自治会館	小	浅間大神		明治21年11月	1888
53	53	目吹　個人宅	小	浅間大神　二十三夜　外２基		明治22年2月	1889
54	54	木間ヶ瀬新宿　路傍	不明	浅間大神　外２基	丸宝紋	明治22年11月	1889
55	55	岡田　個人宅	小	浅間神社　外１基		明治23年1月	1890
56	56	鶴奉　養護学校横	小	浅間大神	丸宝紋	明治23年9月	1890
57	57	東金野井山口　個人宅	小	浅間大神		明治23年	1890
58	58	上花輪　個人宅	小	浅間大神　外32基		明治24年8月	1891
59	59	岩名　個人宅	小	参明藤開山　外１基	丸岩紋	明治27年5月	1894
60	60	平井　個人宅	小	浅間大神		明治27年1月	1894
61	61	木間ヶ瀬前村　個人宅	大	浅間神社		明治27年カ	1894
62	62	東金野井宮内　個人宅	中	浅間大神　霊神碑外５基	丸宝紋	明治29年1月	1896
63	63	木間ヶ瀬新宿　須賀神社	小	浅間大神　他三柱合祀	丸宝紋	明治30年11月	1897
64	64	平井　個人宅	不明	浅間大神　顕彰碑外	丸宝紋	明治	1912
65	65	木間ヶ瀬出洲　水神社	中	浅間神社	丸宝紋	明治	1912
66	66	東宝珠花　個人宅	不明	現在なし	丸宝紋	明治	1912
67	67	尾崎　個人宅	小	現在なし		明治	1912
68	68	東金野井　個人宅	小	浅間神社		明治カ	1912
69	69	東金野井宮内　個人宅	小	浅間大神		明治カ	1912
70	70	東金野井八幡前　個人宅	小	浅間大神		明治カ	1912
71	71	大殿井　香取神社	小	浅間大神		明治カ	1912
72	72	大殿井　個人宅	小	浅間大神		明治カ	1912
73	73	東金野井天神　個人宅	小	浅間大神		明治カ	1912

浅間碑

74	1	西三ケ尾　集会所脇		孝心	【孝心講】	天保4年4月	1833
75	2	蕃昌　徳宝院		浅間神社/現在なし		天保10年	1839
74	3	木間ヶ瀬内野堤根　神明神社		不動明王立像/鋳物	丸宝紋	嘉永3年3月	1850
75	4	岡田　個人宅		浅間大神/小御岳/元祖霊神	丸宝紋	明治8年11月	1875
76	5	木間ヶ瀬飯塚　個人宅		浅間大神	丸宝紋	明治9年6月	1876
77	6	木間ヶ瀬志部前堀　稲荷神社		浅間大神	丸宝紋	明治9年1月	1876

78	7	木間ヶ瀬大山　個人宅		浅間大神	山□紋	明治10年2月	1877
79	8	船形石川山　個人宅		浅間大神	丸宝紋	明治10年1月	1877
80	9	木間ヶ瀬小作　個人宅		仙元大神		明治12年	1879
81	10	船形　熊野神社		参明藤開山	丸岩紋	明治12年11月	1879
82	11	大殿井手師子　個人宅		仙元大神　御岳社　身禄霊神		明治13年1月	1880
83	12	木間ヶ瀬内野堤根　個人宅		浅間神社	丸宝紋	明治14年9月	1881
84	13	木間ヶ瀬松ノ木　個人宅		浅間大神		明治14年9月	1881
85	14	木間ヶ瀬下根　個人宅		日月　浅間大神　小御岳神社　元祖霊神		明治14年11月	1881
86	15	木野崎新町　個人宅		浅間大神	丸宝紋	明治14年2月	1881
87	16	上花輪　幸松屋横		浅間大神	丸岩紋	明治16年1月	1883
88	17	岡田　個人宅		浅間大神　小御嶽神社　元祖霊神	山参紋	明治17年	1884
89	18	木間ヶ瀬下根　個人宅		浅間大神　小御岳神社　元祖霊神	山参紋	明治17年10月	1884
90	19	平井　個人宅		浅間大神		明治18年10月	1885
91	20	平井　個人宅		浅間大神		明治18年	1885
92	21	木間ヶ瀬下根　個人宅		浅間大神	山参紋	明治19年	1886
93	22	木間ヶ瀬下根　個人宅		浅間大神	山参紋	明治20年4月	1887
94	23	岡田　個人宅		浅間大神	山参紋	明治21年	1888
95	24	木野崎大日前　路傍		浅間大神	丸宝紋	明治21年11月	1888
96	25	岡田　個人宅		浅間大神		明治22年3月	1889
97	26	船形西浦　個人宅		浅間大神		明治21年6月1日	1889
98	27	平井　個人宅		浅間大神		明治23年12月	1890
99	28	岡田辻		浅間大神		明治23年	1890
100	29	瀬戸　八坂神社		浅間大神・磐長姫命・元祖霊神		明治25年3月	1892
101	30	平井　個人宅		浅間大神		明治27年11月	1894
102	31	平井　クラウンパッケージ横道		浅間大神	丸宝紋	明治28年2月	1895
103	32	今上　八幡神社		浅間大神	丸宝紋	明治29年3月	1896
104	33	三ツ堀　福田郵便局前		猿田彦大神	【孝心講】	明治41年12月	1908
105	34	木間ヶ瀬小作　無量寿院		浅間大神	丸宝紋	明治	1912
106	35	木間ヶ瀬砂南　個人宅		浅間大神	山参紋	明治カ	1912
107	36	木間ヶ瀬下根　個人宅		浅間大神/千勝大神/八街彦大神		明治カ	1912
108	37	小山　稲荷神社		浅間神社		明治カ	1912
109	38	柏寺　二川小学校		浅間神社・菅原神社		大正3年	1914
110	39	岡田　個人宅		浅間大神/小御嶽神社/元祖霊神		大正3年9月	1914
111	40	東金野井山口　阿夫利神社前		浅間大神		大正3年3月	1914
112	41	小山　稲荷神社		浅間大神・道了大権現・阿夫利大神	山参紋	大正14年1月	1925
113	42	清水　八幡神社		浅間大神・　御嶽大神　併刻		昭和2年9月	1927
114	43	堤根路傍		浅間大神		昭和7年4月	1932
115	44	今上上谷　女体神社		伊勢・三社・富士浅間大神参拝記念碑		昭和13年1月	1938
116	45	岡田　個人宅		浅間大神		昭和14年1月	1939
117	46	木間ヶ瀬下根　個人宅		浅間大神		昭和24年	1949
118	47	東金野井山口　阿夫利神社前		浅間大神			

おわりに

山岳信仰の教義は神道・仏教・修験道の教えが渾然としており、極めて難解なものである。利根川中流域の富士信仰は奥が深く、静岡県・吉田の御師宅に残された慶長年間の檀那帳には「下総関宿」として二〇名の記載があることや、利根川東岸の坂東市周辺に江戸初期からの富士信仰に関わる供養塔も散見されることからその歴史は古いと思われる。筆者が、そのような野田市の富士信仰に真正面から取組み始めたのは三年程前からである。

塚中の石碑や寄附連名の文字を丹念に写し取る作業を続ける内に、富士講に人生をかけた多くの男性達が眼前に現れ始めた。明治二〇年代の弾けるような各講の布教活動には目を見張ったし、師の教えを守り道普請の奉仕活動に邁進する孝心講のグループが、野田市にも存在したことは大きな感動であった。丸宝講の全貌や富士講の活動内容など、今後の課題は山積しているが、取敢えずは市内に於ける富士講の大枠を形に出来たことでほっとしている。

調査の段階で、野田市富士講の特徴とされる個人宅の富士塚が、家の立替や移転・道路工事等により消え去るのを目の当たりにしてきた。時代の趨勢で如何ともし難いことであるが、出来ることならこの一文が自宅の庭に富士塚を所有される方々の目に留まり、大切にしてくださる切っ掛けになればと思っている。

この稿の作成にあたり、資料の提供や多くの御助言を頂いた千葉県の富士講研究者である房総石造物研究会会長・沖本博氏に紙面をもってお礼を申し上げる。

【註】

(1)『木間ケ瀬の歴史』関宿町教育委員会　一九七八

(2)小谷三志　明和二年（一七六五）、武州鳩ヶ谷宿に代々続く河内屋という裕福な麹屋に生まれる。本名・小谷庄兵衛、不二道行名・禄行三志。富士講身禄派八代目を継承。従来の加持祈祷による富士講を脱し、不二孝（後の不二道）という独自の思想を作り上げ、全国に五万から十万人とも云われる弟子を擁する大行者となる。天保一二年（一八四一）、七五歳で没す。

(3)『鳩ヶ谷市の古文書第七・八集　小谷三志日記Ⅰ・Ⅱ』鳩ヶ谷市教育委員会　一九七九

(4)『野田市文化財報告第六集　野田の醤油経営史料集成』野田市郷土博物館　一九八五

(5)『富士講の歴史』二六一頁　岩科小一郎著名著出版　一九八三

(6)富士山吉田口八合目に大行合（おおいきあい）という場所がある。十郎右衛門はこの地で道者相手に水を売ることを生業としていた。そこで食行身禄の講話を聞く機会を得て、直弟子となり行名を北行鏡月と名乗った。身禄の死後は、富士吉田で御師の株を買って田辺近江となり、息子の中雁丸豊宗（行名・仙行伸月）と共に布教に努め、甲相地方の多くの富士講を支配するようになる。

(7)戦前の神道十三派のひとつ。明治初期の宗教改革時に薩摩出身の宍野半により組織化された。長谷川角行を開祖とする富士講を基盤としたが、神道色の強い教団として展開した。

(8)同富士塚に造立された「浅間祠重修記」や寄附連名碑による。

(9)前掲『小谷三志日記Ⅰ』

(10)「武州羽生領における不二道」小林秀樹著『富士信仰研究　創刊号』富士信仰研究会　二〇〇〇

(11)前掲『小谷三志日記Ⅰ』

(12)目吹・川島家脇の富士塚。明治九年造立の浅間大神碑は丸宝講紋だが、それ以降の碑に彫られた講紋は山参講紋である。

(13) 前掲『富士講の歴史』三八〇頁
(14) 前掲『野田市文化財報告第六集』
(15) 前掲『富士講の歴史』二六二頁
(16) 『富士吉田市史資料編第五巻』富士吉田市史編さん委員会一九九七、によれば、本御師家（戦国末期～江戸初期からの御師）筋とされる上文司家に残る、慶長八年（一六〇三）の檀那帳に「下総国・せき屋」の地名で二〇人の氏名が記載されている。

（いしだ・としこ　当館客員研究員）

昭和初期の富士登山　野田市・中村藤一郎家蔵
富士山にて。笠に㊟の文字がみえる。